



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シュニッツラー文学の背景
Author(s)	加藤, 寛蔵
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 9, 91-100
Issue Date	1997-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37610
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_91-100.pdf



原 著

シュニッツラー文学の背景

加藤 寛蔵

On the Background of Schnitzler's Literature

Kanzo Kato

Abstract

Schnitzler was a writer who pursued a career as a novelist in Vienna where there existed double-faced aspects of new and old, traditional and innovative, long-established and newly-rising, and gay and dull. It has been said that his works are a curious mixture of irony and nostalgia, casualness and elegance, skepticism and intelligence, and idleness and melancholy.

The present paper, putting aside the emotional image of the novelist, discusses fundamentals of the writer from the following viewpoints: 1) the relationships between positivists' medicine and Schnitzler's writings and 2) the double feature of the society of Vienna.

要 旨

シュニッツラーは、新と旧、伝統と革新、因襲と新興、陽気と憂鬱などの二面性が存在していたウィーンで作家活動をした作家である。彼の作品は、皮肉と郷愁、気さくと気取り、懷疑と知性、無為と憂愁が奇妙に入り交じっているものであると言われている。本稿では、シュニッツラーの情緒的イメージを避け、次の観点から、つまり1) 実証主義的医学とシュニッツラーの関係、2) ウィーン社会の二面性から作家のもつ基本的なものを論じてみたい。

キーワード：内的独白、精神分析的文字、世紀末ウィーンの二重モラル

はじめに

フロイトは、1922年、シュニッツラーに宛てた手紙の中で、「貴兄が直観によって—しかし本当は細やかな自己認識の結果として—小生が患者という他人相手に散々苦勞して研究を重ねた末に発見したのと、まさに同じ事柄を識っていらっしゃるとの印象を得るにいたしました。」¹⁾と言ってシュニッツラーとの精神的双児であることを表明している。シュニッツラー文学の一つの特徴は、人間心理の意識下・無意識の内に宿り人間の行動様式を規定する魔的なものを印象主義的に、内的独白の手法を駆使し精緻に描写して見せる点にあるが、これをフロイトの精神分析学と比較して精神分析的文学と言ってよいだろう。まず、シュニッツラー文学のこの特質を彼が医学教育を受けたウィーン大学医学部の実証的医学との関係の中で考察し、シュニッ

ツラー文学の持つ精神医学的・人間的・道徳的なものが生まれてくる素地を見てみたい。そして読者が主人公の意識の中に間断なく表われる事象や知覚の反応を直接のぞける手法としての印象主義的「内的独白」について考えてみる。

次にシュニッツラーは、ウィーン世紀末のブルジョワ世相を冷徹に観察し、彼の人間的・道徳的側面からその虚偽、欺瞞を暴くのだが、そもそもそのブルジョア世相とはどんなものかを、特殊ウィーン的なものと言う視点より考察する。

1. 実証主義的医学とシュニッツラー

一千年に渡るハプスブルク帝国の老都ウィーンは、19世紀の後半から20世紀初期の世紀末(Jahrhundertwende)に於いて、哲学、自然科学、文学、美術、音楽等、多岐に渡る分野に於いて、革新性、独創性に富む学者、芸術家を多数輩出した。世紀末ウィーン文化の担い手となったのは、物理学、精神分析、哲学では、マッハ、フロイト、ヴィットゲンスタインなどの学者であり、文学では、シュニッツラー、ホフマンスタールなどの作家であり、美術ではクリムト、シーレ、建築ではオットー・ヴァーグナー、アドルフ・ロース、音楽ではシェーンベルク、マーラーなどの芸術家などである。

第一次大戦まで、没落を耐えているオーストリア＝ハンガリー帝国の帝都で活躍した学者、芸術家は余りに多く列挙し難い程である。それは数だけの問題ではない。この時期、彼らの醸し出した多面に渡る豊かな文化は、二十世紀を通底して我々の世界観、人間観に大きな影響力を持っている。

ところで、「世紀末ウィーン文化」のすぐれた研究家ショースキーは、この文化の担い手達を彼らの父親世代と比較し「若者達 die Jungen」として、世紀末ウィーン文化の総体を彼らの伝統的権威主義文化への反抗として捉えている。「フロイトを生んだ都市の新しい文化創造者達

は、こうして繰り返し一種の集団的エディプスの反逆と言う自己規定を行った」²⁾「若者達」は「父親の世代」の文化のただ中において教養をつみ、そこで自己否定し、新たな文化の創造を企てたのである。「彼らが攻撃を加えたのは、自分達を育てた上昇期の古典的自由主義の価値体系だった。」³⁾ 彼らは自分達の存在をならしめている価値体系を自己否定的に「批判的に書き換え」⁴⁾ しようとしたのである。

それでは、シュニッツラーは父親世代の支配的、権威的な世界の中にいながら、そこからいかなる「批判的な書き換え」を提示したのか。世紀末ウィーン社会には、「批判的に書き換え」るべき矛盾が多層をなして同在していた。合理と非合理、科学と非科学、伝統と革新、高貴と猥雑、因襲と新興、陽気と憂鬱などが共在し、すべてがその特質を失うことなく合一、止揚されなければならない状態にあった。ここでは、シュニッツラー文学の精神風土、その素地を探る意味からまず範囲を限定し、シュニッツラーが医学教育を受けたウィーン大学医学部の実証科学的、唯物学的学風に対する彼の関わりを考察し、彼独自の作家としての自己規定の仕方を見てみたい。

当時の医学のメッカ、ウィーン大学医学部では、「診断」と「治療」、「唯物」と「精神」等の二項が合一を求められつつ対立緊張関係にあった。シュニッツラーはこの矛盾関係の中に身を置き、それらの止揚を希求したのだが、いわば永遠のテーマであるその高次の合一を医学の内部においてなし得なかった。彼はフロイトと同じ精神医学の道を辿りながら、フロイトのように後世の人間観を変えるような学説を樹立することはなかったが、医者的＝人間的・道徳的なものの地平を文学のなかで拓こうとしたといえる。

彼は、医学そのものの中では「批判的書き換え」は出来なかったのだが、精神医学の研究で得られた分析的知見を生かして、文学の中で「内

的独白 innerer Monolog」と言う新しい表現手法で、人間の心の奥底にある空想、願望、記憶、混乱した観念などを記述する豊かな文学を作り上げた。この表現方法はドイツ文学圏では初めてであり、この独特な様式を駆使して『グストル少尉 (Leutnant Gustl) 1900』を発表する。実に、ジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』のモリー・ブルームの内的独白の22年前のことである。

ここで、シュニッツラーの医師としての生涯をみてみたい。彼は喉頭鏡の発明者で、ウィーン大学医学部教授であった耳鼻咽喉科医ヨハネス・シュニッツラーの息子として1862年ウィーンに生まれている。彼の自叙伝『ウィーンの青春』によると、父は社交的で顔が広く、シュニッツラー家には、ウィーン文化人、文学者、舞台俳優、オペラ歌手などが頻繁に出入りしていた。彼の文学的才能はこのような雰囲気の中で育ったのだが、彼は父の強い要請で、1879年ウィーン大学医学部に入学する。精神医学を研究し、フロイトと同じナンシーのベルネームの下で催眠術を勉強する。父の診療所で、催眠術を施し失語症の患者を治療したりしている。31歳の時、父の死亡で好きな精神医学をやめ父のあとを継いで気にそまない咽喉科を開業したが、40歳前に医師をやめ文学に専念する。

19世紀後半の支配的思潮は、科学主義であった。これは経験的に実証されうるものに認識の範囲を限定し、そこで得られた認識を真の知識とし、その積み重ねが科学を発達させ、ひいては人類の幸福と進歩をもたらすと言う思想である。勿論、この考えは現在に於いても通用するものであるが、この実証可能な経験に基づく医学、つまり近代医学を確立したのが当時のウィーン大学医学部の教授達であった。

解剖学者、外科医ロキタンスキ(1804～1881)は、病理解剖の基礎を築き、スコダ(1805～1881)は、ロキタンスキのデータを整理して近代診断学を確立した。後に外科のビル

ロート(1827～1894)も加わり、実証的・科学的医学の学風を継承する。シュニッツラーは、フロイトより8年遅れてウィーン大学に1879年に入学して医学教育を受けている。

科学的、実証的医学は病理解剖による病因の追求、つまり患者の死体解剖によって正確な診断を下すことに重点がおかれ、これは医学の進歩を飛躍的にあげたのだが、ともすれば治療が軽視され勝ちであった。「ウィーン大学医学部で行われる講義は、ロキタンスキとスコダの方針で、治療法は全く扱われず、もっぱら診断に関するものばかりであった。学生達は、観察対象が死ぬと、解剖して調べ、『最終診断 (Epikrisis)』と呼ばれる批判的な討論を重ねて医学の知識を獲得した」⁵⁾

シュニッツラーもこの診断偏重の学風の洗礼を受けるわけだが、自伝『ウィーンの青春』のなかでしばしば不満を吐露している。客観的に正しい診断の対象である死体が、それ自体が客観的実在とされる唯物主義に彼は懐疑的になっていった。「死者のベットの枕元には、死んだばかりの見知らぬ人の場合でも、死神がある意味では依然として幽霊のように大きな幻影として立っている。……死者室のなかを死神はその戦慄を脱ぎ捨てて、一種のこうるさい先生として出没するのだが、生徒のほうは彼を嘲弄しても許されると思うのだ」⁶⁾

死んだばかりの死体、そこにはまだその人の生のぬくもりがあるのだが、いざ死体室に入ってくると、正確な病因を解説される物体、あるいは病因を教えるこうるさい先生となってしまう。生徒のほうは、この先生を嘲弄し、もて遊ぶ。シュニッツラーは、ウィーン大学の医学部の解剖室の即物主義に毒された雰囲気を諧謔こめて述べている。

ジョンストンは『ウィーン精神』の中で次のような文を引用している。「次に記すのは、ウィーン総合病院を見学した医師が私に語ってくれたことである。ちよどこかれは、医学生た

ちが、臨終に近い女性患者を取り囲んで臨床講義を受けているところに行き当たった。患者の病気は、肋膜炎か肺炎であった。学生たちはこの病気の末期に特有の肺の捻髪音を代わる代わる聴き取っていた。学生たちが病室を出終わらないうちにこの女性は死んだ。医師は、臨床講義を続けている教授に、こういう場合の患者の治療法を進言してみた。すると教授から『治療ですか？ 無意味ですね。診断—われわれにとって大切なのは、これだけです』という返事がかえってきた」⁷⁾。このような診断偏重、治療軽視の風潮をジョンストンは、「治療ニヒリズム」⁸⁾と呼んでいる。勿論、ウィーン大学医学部のすべてが、死体解剖による病因追求に熱中し治療を軽視していたわけではない。診断重視の考えは科学信仰の結果であって、成果は19世紀初頭に現われた精神的なものと同体的なものの統一と言うロマン的医学の否定としての近代医学を確立した点にある。「病気は生の一部である。医者役目とは、病気をなくすことではなく、それを究明することである。19世紀の医者は、自然のプロセスに介入すべきではないと考えていた」⁹⁾。このような無介入の態度は、医学の分野だけでなく、ウィーン世紀末の社会全体を覆っていたと言える。

精神医学の分野でも、死後解剖中心で、死後解剖から原因所見の見つからない神経疾患者は無視させるのが通例であった。「神経衰弱症はよく脳腫瘍、あるいは髄膜炎だと診断された」¹⁰⁾。死後解剖からは如何なる正確な原因所見の見い出せない神経疾患者に医学的関心ははられなかったと言える。

当時は心の病気が精神的原因からだけでも起こりうるという心因性については、死後診断を重視する実証主義医学の学風内では等閑視されていた。治療と言えば「温水浴や弱い電気ショックが施され、気休め程度の薬が与えられただけだった」¹¹⁾。精神医学の分野は治療が最も軽視されている分野でもあった。精神病患者は、公立

病院の裏手の監獄のような「愚痴者の塔 Narrenturm」におしこめられていた。「死後診断こそ医学の使命であり、治療なら患部切除をもって最上とする信念が圧倒的に強い」¹²⁾。ウィーン医学界に於いて、神経症の原因は身体でなく、精神的なものだと考えて治療に専念するのが、フロイトである。フロイトは、当然の事ながら患者を救う必要から、医療的必要から精神分析を行うのである。これが、フロイト的「診断」と「治療」の止揚であった。フロイトの治療方法の特色は、表面から内奥へ下り、そこに隠蔽されているものを取り出すことで、治療が完了するという点にある。例えば、ヒステリー患者の場合、それは身体的なものから起こるものでなく、幼児期の性的なトラウマ（心の外傷）が、無意識的にヒステリー症状のなかで再出現していて、その記憶を意識化すれば治癒するといえる。一方、シュニッツラーは、失語症の患者の心因性を認め、このことは、心のない実証精神医学への反逆であるが、催眠術、自由連想法を施し治療を行うのである。しかし、学問的に深化させることはなかった。癒すものと癒される者との信頼関係、人間関係、これは診断重視の医学では軽視されがちな側面であったと言える。シュニッツラーは、この人間関係のなかで自らの人間洞察を深め、人間の内面、彼の文学の特質である微妙な心の動きの描写の基礎を固めていった。

フロイトが、精神症の心因性を把握するために催眠術を導入したことが脳解剖生理学の立場をとるウィーンの医学界への反逆で、その後のフロイトの不遇の原因となっていることはよく知られているが、シュニッツラーも実証的なものから非科学的なものへ傾斜していく。彼は、ウィーン医学界の正統派としての科学主義から逸脱し、不気味な存在としての人間の内部に宿る未知の魂の世界を催眠術を使って覗こうとする。

「私は催眠術を研究し始めていた。催眠作用に

は当時、とりわけシャルコとベルンハイムを通して、関心が高まっていた。私は、機能的失声—すなわち発声器官には証明できる器官の変化はないのに声が出ないこと—のいくつかの症例を催眠術を使って、あるいは暗示のみで治すことに成功していて、それに関係する病歴を『国際臨床展望』に発表した。私はいく人かの優れた霊媒を見つけていたので、彼らを自分の喉頭学の分野に用いることに限定せず、彼らに対して、著名な催眠術師の模範に倣って、さまざまな、心理学的実験を試みた。実験はそれ自体としては面白くないわけではないが、何ら真に新しい知見をもたらさず、私は書き留めはしたが、学問的にまとめることはなかった」¹³⁾

シュニッツラーは催眠術を施した治療のデータを「学問的にまとめることはなかった」と言っているが、これはフロイトの著作を意識していることである。この1889年にシュニッツラーはトラウマ（心の外傷）を心の暗部から取り出して意識化することによって本当の自分に至るというカタリシスを短編小説に結晶させている。この短編小説『息子 Der Sohn』には、『ある医者のメモから Aus den Papieren eines Arztes』と言う副題がついている。シュニッツラーは心理学的実験のデータを「書き留め」た結果を文学作品の中で結実させている。この小説は、母親が期待せぬ子供を生むことになり、この自分の子供を産後直ちに窒息死させようとしたこと、子供の側から言えば、心の外傷を持つことから端を発している。子供はこの心の外傷を無意識のうちに記憶し成長し、結局は母親を殺してしまう物語である。精神的には、幼児期の心の外傷が無意識の内に成人するまでに残るかどうかが主題した物語であるが、それだけでない。

シュニッツラーは、精神的・医師的なものを素地として、女性の性と分娩、生みの親が乳飲み子を殺そうとした母親の深い罪意識とその償いとしての子供への溺愛、そして子供の墮落、母親と子供のひいては人間相互間の意思の

疎通の欠如、母親殺しが下層階級の住む裏町であることから考えられる社会問題などをテーマにした掘りのある文学となっている。嬰兒殺しは色々な作家の主題にもなっている古くて新しい問題でもある。生みの母親が乳飲み子を殺そうとして子供にトラウマを与えたと言うテーマを、シュニッツラーは、最後の長編小説『テレーゼ・ある女性の年代記 (Therese・Chronik eines Frauenlebens) 1928』でもう一度展開している。この点から考えると27歳の時の『息子』は、『テレーゼ』の習作とも考えられる。これは、シュニッツラーが如何に精神的・医師的なものに規定されて作品を書いているかを示すものである。シュニッツラーは医学を学んだ若い時に彼の作家としてのテーマが決まっていた、何ら発展性のない作家であると言えばそれまでだが、内容は深化され、背景も多彩となっている。シュニッツラー文学を特徴づけている手法である「内的独白」も1900年に『グストル少尉』で試み、24年後にこの手法を使って『令嬢エルゼ』を発表する。内的独白は、「合理的な表現をとる以前の混迷の段階の意識」¹⁴⁾を扱っている点から考えて、精神分析医シュニッツラーならではの、当時としては彼固有の表現方法であったと言える。

内的独白の小説は一人称の主人公〈私〉の、精神分析で言うところの自由連想のおもむくまま、「こう言うこと言うのは無意味だ」とか「これを言うのは前後と関係ない」とかの判断を一切なくして、心に浮かぶそのままをいわば印象主義的に無意味、無秩序のままに記述するものである。主人公〈私〉の想像、願望は、直接〈私〉の意識下より出て来たように描出し作者の注釈や説明はない。作者は主人公の内面に直接入り込んでその人物と合体し、作者が入り込んだ主人公の内面から現実が見られ描出される。

この内的独白は、心理小説といっても作者が人物を外部より眺め「彼は……と感じた」とか「彼は……と想像した」とかの作者の介入はな

く、又読者と言う他人などまるで存在していないかのように一人称の〈私〉は、「語ることもせず、聴き手や読者に向かって話しかけることもしない。ただ、自分の意識の中に、その時々己れの状況と、その状況によって呼び起こされる追想を、ともどもに映し出すだけである。それ故に、内的独白によって描き出される外的世界は、私という人物の意識に映った映像にすぎないように見える」¹⁵⁾

内的独白においては、「心的経過が慎重な言葉に形成される手前でさまざまな意識の制御段階を移ろうままに描出」¹⁶⁾されるので、物語として脈絡がなく、ただ、読者は主人公の意識の中に表わされている無秩序、無時間性、変移性のある反応をじかに知り得るだけである。読者は、理性的な制御もうけず論理的な秩序のない意識の虚構世界の表現から意味を解読しなければならない。理性的に論理的に意識化された表現は、意識化手前の心の暗部を隠すことになる。この隠されてしまうものを映し出すのが内的独白と言ってよいだろう。『グストル少尉』・『令嬢エルゼ』の作品内在的解釈はここでは割愛するが、シュニッツラーの作家としてのエートスは非人格・非生命化の傾向の強い実証主義的医学へのアンチ・テーゼの中で獲得されたもので、主人公「エルゼ」の内面記述も暖かい眼差での周到な心理の追跡である。

2. ウィーン世紀末社会の二面性

ショースキーは、シュニッツラーを評して「ウィーンの上層ブルジョワ社会の分析家として彼に匹敵するものは、同時代の文学者の間には一人としていなかった……世紀末ウィーンの崩れゆく、道徳的一唯美的文化を彼は余人の及ばぬほどに描いたのである」¹⁷⁾と言っている。日本に於いて、シュニッツラーは、解体しつつあるハプスブルク帝国の爛熟したウィーン世紀末文化を背景に、倦怠と虚偽を刹那的に生きる人間の心を精緻に分析描写したとか、彼の文学

は繊細、優美、華麗であるとか、多分に情調的・雰囲気的な面から読まれてきた。せいぜい積極的に評価されたとしても、皮肉で憂鬱なウィーン世紀末の世相の暴露家である、と言った具合である。ショースキーは、ウィーン世紀末の反ユダヤ主義・社会主義の台頭そして自由主義の退潮と言う混乱した政治状況の中で、シュニッツラーを「上層ブルジョワ社会の分析家」と規定し社会的・歴史的視点からの評価しているのだが、これは、シュニッツラー自身の出自が上層ブルジョワジー、成功したドイツ系ユダヤ人であり、「道徳的一唯美的文化」¹⁸⁾の中で育ったからなし得た自分達の階層の自己分析だったのである。それではショースキーの言うシュニッツラーの文学の素地となる父親の世代の上層ブルジョワ社会、世相、「道徳的一唯美的文化」とは如何なるものだったろうか。ここでは、シュニッツラー文学の大きなテーマである、仮象と実在、表と裏、社会的身振りである仮面などに焦点を合せ、ウィーン世紀末の上層ブルジョワ社会を考察することにする。

上層ブルジョワジーの子孫、ウィーン世紀末文化の担い手達は、表面的に如何に安定した世界で育ったかをシュテファン・ツヴァイクが物語っている。それは共存共栄というウィーン的原理を至上命令とし、各民族、ユダヤ人、貧しいものも富めるものも、平和な共同生活していた。「階層と落ち着いた推移を持つ秩序づけられた世界で、性急さのない世界」¹⁹⁾であった。そして歴史はあらゆる世界のうちの最良の世界に向かって間違いなく進んでいると実感していた。科学・技術の進歩は彼らの生活を豊かにし、不断の進歩と言う言葉は信仰にまでなっていた。軍事、政治に関心がなかったが、音楽や劇場や芸術には異常とも言える関心を示し、陽気に生を楽しんでいた。

ウィーン上層ブルジョアジーを中心とする自由派市民階級は、経済活動における「自由放任(レッセ・ヒエール)」と自由競争を基本とする

経済原則の下で、産業の発展、製造技術の開発などで莫大な物質的富を築いた。ツヴァイクが描く天下奉平ムードの社会生活は、彼らの富に裏づけられた社会世相である。皇帝フランツ・ヨーゼフの英断による「リングストラセ開発」に伴う、ウィーン市拡大と都市の近代化と相俟って、大いに産業を発展させた。この時代は泡沫会社氾濫時代 (Gründerzeit) と言い、投資家、産業創立者が莫大な財産を築いたり、失ったりした時代でもある。フランス、イギリスと違って旧支配体制である貴族階級を革命と言う手段で駆逐することのなかったウィーン上層ブルジョアジーは、父なる保護者として皇帝に心底忠誠を誓いながら、ハプスブルク帝国の庇護の下、社会的、経済的進出を実現してゆく。当然のことながら、上層ブルジョアジーの価値観は古い典礼や慣習に束縛された非生産的な貴族階級の価値観と融合することがなかった。とは言っても彼らは心情的には貴族社会と同化したい欲求は強く二重の価値観の中でゆれていた。彼等のこのアンビィヴァレントな性格が特殊ウィーン的であり、彼等の築いた文化にそれが現われている。ウィーン医学界の奉斗ビルロートは自分を「精神の貴族」としたのは、貴族志向の好例である。このような二重性の並立は、彼らの精神構造となっていた。

上層ブルジョアジーの社会、父親の世代の価値観は「道徳的・科学的文化」である。「道徳は、堅固で廉潔で抑制であり、政治的には法の支配」²⁰⁾であった。この価値観はヨーロッパの他の国々にみられる、知識と勤勉、理性と自由の尊重という近代的市民階級の価値観と変わるところがない。つまり「知的には、精神による肉体の統制……科学・教育ならびに激しい労働を通じての社会の進歩」²¹⁾の尊重である。ウィーン上層ブルジョアジーは、自分達の築いた物質的富と文化、安定した社会を固守するために、子孫に最高の教育を与えた。この「若き世代」は泡沫社会氾濫時代の新興成金が全力を傾けて

教育をした合理的精神を身につけた教養人であった。と同時に父親時代の懐古的・貴族模倣文化を批判する精神をも養っていた。

父親の世代が築いた高等教育制度は、「人生のためでなく、ただ勉強のための、愚しい荒涼とした勉強」²²⁾であり無味乾燥で機械的なものであった。上層ブルジョアジーの高等教育制度は、新しい知識階級を生み、新たな文化の形成、産業面における工業化を促進し、物質的繁栄をもたらすのであるが、それは精神による肉体の統制の教育であり、非理性的なもの、自然なものを抑制する教育であった。「自然の衝動を意識から押しやろうと努める人は、そうすることによって決してそれを片づけてしまうわけではなく、唯意識下に押し込むという危険をおかすだけだ。」²³⁾と言うことを、父親の世代の倫理感は知らなかったのである。ところが、表面上は廉潔なウィーンのブルジョアジーの社会道徳の下で、自然の衝動、性の発散が陰微に蔓延していたのである。シュニッツラーは、この救い難いモラルの二重構造、虚偽性を鋭利に暴き出す。その好例は、『死人に口なし (die Toten schweigen)』である。これは、大学教授とその若い妻の姦通を問題にした小説である。図式的には厳格な道徳の体現者、「父親世代」の理想像、知識と地位・財産の合一者である大学教授を形式的表面とし、妻の抑圧、束縛されていたはずの性衝動の発散を現実面としてとらえることが出来る。さらに醇風美俗の体現者であるはずの上流階級夫人と言うペルソナ（仮面）と個人的性感情の相克とその破壊的強さを描いたとも言える。ペルソナとは、ギリシヤと古典劇において役者がつけた仮面のことである。人間が社会の中で生きてゆくためには、社会環境と協調してゆくための役割を分担していなければならない。人間は理性的に私的感情を抑制して、つまり仮面をつけて役割自己とならなければならないのだが、世紀末ウィーンではこの合理精神は個人的な面でも危機に晒される。「合理的人間

は、より豊かながらより危機で移り気なあの被造物心理の人間に席を譲る」²⁴⁾のである。ここで言う心理的人間とは、自己分裂的・自己喪失の人間でシュニツラーはこういう人物の内面の心理を記述する。意識と無意識、合理性和非合理性という二重の精神構造が若い世代の底深い不安を持った精神状況となっていた。心理的人間の台頭は上層ブルジョアジーの合理的・科学的精神の崩壊の反映である。経済面では1872年の万国博覧会開催8日後、ウィーン証券取引所での株価の大暴落による金融経済の破綻として現われる。これは「自由放任」と自由主義経済の基本理念として経済的繁栄と富を築いて来た上層ブルジョアジーの価値観と彼らの存立基盤への懐疑となる。特に若い世代は文化の深刻な危機意識に彩られることになった。政治面では上層ブルジョアジーのヘゲモニーへの反ユダヤ主義的大衆政党の挟撃である。上層ブルジョアジーの自由派は、反ユダヤ的なキリスト教社会派、汎ドイツ派、社会主義者、スラブ民族主義者の大衆運動によって議会の政治勢力としての地位を失ってしまう。

このような上層ブルジョワジーの経済的凋落・政治的敗北・文化的危機の中で、若い世代は、自分達がそこで育った、いわば自分達の存立基盤である父親の世代の文化に対する、愛一憎のアンビヴァレントな不安な精神状況に置かれる。

上層ブルジョアジーの自由主義は、彼ら自身の力によって勝ちとられたものでなく、当初から貴族、帝国の官僚と実権を分かち合った妥協の産物であった。このことが彼らの学問を含めた文化的・精神世界を規定する。「ハプスブルク王国の古いカトリック貴族階級と張り合おうとする気持ち」²⁵⁾を不完全な形で自分達の文化をあらわそうとした。彼の自己表現は創造的なものではなく、貴族を模倣した過去追憶的なものであった。「家は過去美術品のイミテーションで満ちていた。どの部屋も、さまざまな様式の

けばけばしい美術品でごった返していた」²⁶⁾彼らの美的趣味も「当人の社会的・経済的地位のバロメータであった」²⁷⁾。

この顕示的な外面重視は、性をめぐる問題についても二重モラルとしてあらわれる。「良い家柄の娘は、誕生の時から夫とともに婚礼の祭壇を離れる日まで、完全に消毒された雰囲気の中に生きなければならなかった」²⁸⁾。家父長的権威、ヴィクトリア朝的禁欲的倫理が良家の娘の性を抑圧していた。女性らしさは不自然な人工的服装で隠され、他人の手を借りなければ服を着ることも脱ぐことも出来なかった。彼女らは、家庭の奥深く保護されて、外出する際には付き添いの婦人に伴われなければならなかった。女性的なものは人工細工で被い隠されていた。こう言う厳格な禁欲的道德の一方で、男性にとってはウィーンは性の開放された町であった。父親は娘を性に無知なまま保護していたが、息子相手には可愛らしい遊び女 *stüsses Mädel* を家に雇い、性を知ることをすすめた。これは外面的に品行を守るための策でもあった。

外面的にモラルを極限的に厳しくすること、内面的には、反モラルがいびつな型で潜行する。世期末ウィーンの性モラルは極端な二極対立の緊張関係としてあった。厳格な社会道德の表面下では、反モラルが、「美しい豪華な店や優雅な散歩道のある、清潔に掃き清められた街路も、その地下には汚水溜の汚物を運び去る下水溝を隠しているように」²⁹⁾ 汚濁にまみれて暗躍していた。

シュニツラーは『輪舞 Reigen 1900』で表面下で跋扈していたウィーン世紀末の性風俗を白日の下に晒け出す。登場人物は、娼婦、兵士、女中、若様、若い人妻、その夫、おぼこ娘、詩人、女優、伯爵の計十人で職業も身分も違う五人ずつの男女が次々に相手を変えて、十組のペアの性愛場面が、舞踊形式でドラマが進められる。登場人物はウィーン世紀末の代表的階層の人物であり、各層に渡る性愛を批判的、冷徹に

挟り出してみせる。特に上流階級である若様若い人妻、若い人妻一夫、夫一おぼこ娘の場面は、ページ数も多く仮面の下での欺瞞的愛欲を喜劇的にかつ厳肅に剥がしてみる。シュニッツラーは自分と同じ階層の二重モラルに対して特に真剣に批判の眼を向けていると言える。『輪舞』は別の読み方、社会階層の貴賤の別なく、根底において人間は情欲に翻弄されるものであると言う考えをとらず、ウィーン世紀末世相の観察者・批判、断罪者シュニッツラーとして考えるべきであろう。

結 語

シュニッツラー文学の背景をなすものとして、彼の精神医学が如何に表現方法として文学に生かされているか、そして上層ブルジョアジーの価値観の崩壊と随伴して顕在化する二重モラルが彼の文学の素地となってることを見て来たが、これらは広範多岐に渡るシュニッツラー文学のごく一部でしかない。ユダヤ人であるシュニッツラーの反ユダヤ主義との関係、彼の印象主義的傾向とエルンスト・マッハの感覚一元論との関係、同時代の作家との関係、そしてウィーンカフェ文化など考察しなければならない問題が多くある。本稿はこれらの問題への視野を展望させるものとして実証主義医学とシュニッツラー、ウィーン・ブルジョア社会のもつ二重モラルについて考察したが、二点とも牽強附会の感が免れない。

注

シュニッツラーのテキストは、Gesammelte Werke, Die Erzählenden Schriften I. II, Die dramatischen Werke I. II, Fischer Verlag を使用した。

引用文献

- 1) 池内紀編 『ウィーン聖なる春』(国書刊行会, 1986) 246 頁.
- 2) Carl Schorske: Fin-de-Siècle Vienna Politics and Culture. New York, Alfred Knoph, 1980. 安井琢磨訳『世紀末ウィーン』(岩波書店, 1988) 14 頁.
- 3) ショースキー, 15 頁.
- 4) ショースキー, 14 頁.
- 5) William M. Johnston: The Austrian Mind. An Intellectual and Social History. 1848-1938, Berkely and Losangeles, University of California Press, 1972. 井上・岩切・林部訳『ウィーン精神』I, II, (みすず書房, 1986) 346 頁.
- 6) Arthur Schnitzler: Jugend in Wien, Verlag Fritz Molden, Wien-München-Zürich-New York, 1968. S.127 邦訳 田尻三千夫訳『ウィーンの青春』(みすず書房, 1989) 302-303 頁.
- 7) ジョンストン, 347 頁.
- 8) 同書, 339 頁.
- 9) 同書, 348 頁.
- 10) 同書, 349 頁.
- 11) 同書, 349 頁.
- 12) 同書, 385 頁.
- 13) A. Schnitzler; ibid. S.318 邦訳, 119 頁.
- 14) Robert Humphrey: Stream of Consciousness in the Modern Novel. The Regents of University of California, 1954 石田幸太郎訳『現代小説と意識の流れ』(英宝社, 1979) 6 頁.
- 15) Franz K. Stanzel: Theorie des Erzählens, Verlag Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1979 前田彰一訳『物語の構造』(岩波書店, 1989) 215 頁.
- 16) ハンプリー, 43 頁.
- 17) ショースキー, 32 頁.
- 18) 同書, 22 頁.
- 19) Stefan Zweig: Die Welt von Gestern. Stockholm, Berman-Fischer, 1944. Frankfurt a.M., S. Fischer 1973, S.41passim, "Die Welt der Sicherheit" 邦訳 原田義人訳『昨日の世界』(みすず書房, 1973) 49 頁.
- 20) ショースキー, 23 頁.
- 21) 同書, 23 頁.
- 22) S. Zweig, ibid. S.46. "Die Schule im vorigen Jahrhundert". 邦訳 55 頁.
- 23) S. Zweig, ibid. S.88. "Eros Matutinis" 邦訳 109 頁.

- 24) ショースキー, 20 頁.
- 25) Allan Tanik and Stephen Toulmin: Wittgenstein's Vienna. New York, Simon & Schuster, 1973. 藤村龍雄訳『ウィトゲンスタインのウィーン』(TBS プリタニカ, 1978) 49 頁.
- 26) 同書 48 頁.
- 27) 同書 50 頁.
- 28) S. Zweig. ibid. S.97. "Eros Matutinis" 邦訳 121 頁.
- 29) S. Zweig. ibid. S.101. 邦訳 125 頁.

参考文献

- 1. Schnitzler, Arthur: Medizinische Schriften 1988.
- 2. Schnitzler, Arthur: Briefe 1913-1931, 1984.
- 3. Allerdissen, Rolf: Arthur Schnitzler: Impressionistisches Rollenspiel und skeptischer Moralismus in seinen Erzählungen, 1985.
- 4. H. Rey,: Arthur Schnitzler: Die späte Prosa als Gipfel seines Schaffens, 1968.
- 5. Janz, Rolf-Peter/Laermann, Klaus: Arthur Schnitzler: Zur Diagnose des Wiener Bürger-tums im Fin de siècle, 1977.
- 6. 木村直司 編『ウィーン世期末の文化』東洋出版, 1993
- 7. 中央大学人文科学研究所 編『陽気な黙示録』中央大学出版部, 1994
- 8. 辻 邦生 責任編集『華麗なる頽廃』集英社, 1986
- 9. 矢田俊隆 著『ハプスブルク帝国史研究』岩波書店, 1977.
- 10. 上山安敏 著『フロイトとユング』岩波書店, 1989.
- 11. 外林大作 著『フロイトの読み方』誠信書房, 1983.
- 12. 鈴木金弥 著『フロイト』清水書院, 1991.
- 13. レオニード・アンドレーエフ 著『印象主義運動』貝澤哉 訳 水声社, 1994.
- 14. ヒルデ・シュピール 著『ウィーン・黄金の秋』別宮貞徳 訳 原書房, 1993.
- 15. 岩淵達治著『シュニツラー』清水書院, 1994
- 16. 山之内克子著『ウィーン』講談社現代新書, 1995